

チャンスに強い打撃と、声でチームを引っ張る丹原の長井奨哉

は「爆発力はないが、ひとつずつ結果がついてきた」と話す。

投手は、切れ味鋭いスライダーと打たれても動じないマウンド度胸が持ち味の松崎が柱。春の大会は腕を痛めて本来の投球ではなかったが、安定感が出てきた。丁寧にコーナーを突く安藤聖の成長も好材料だ。消極的で見逃し三振が多いと言われた打線も、徐々にバットが振れるようになった。昨夏から正捕手の5番山本英貴や4番を任せられることが多くなった2年重川太河は力がある。

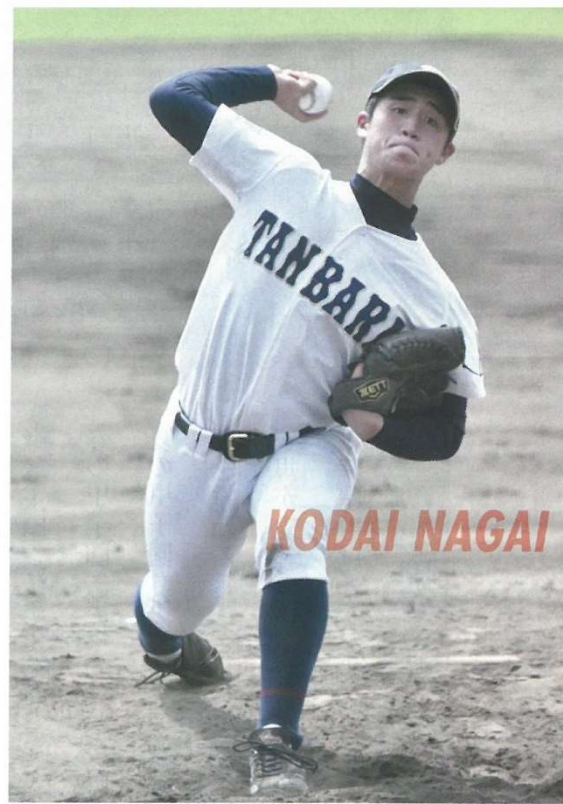
**投手力に安定感**

シード外ながら安定した力がある

のは秋ベスト4、春ベスト8の丹原。1年から試合に出ている3年生が多く、守りでリズムをつくり攻撃に上げるチームの特徴を体现する。

右ひじを手術し、春は大事を取ったエース永井が復帰。コントロールがよく試合をつくれる曾我幹人、180cmの長身から角度のある球を投げる武方大夢も控え、タイプの異なる右オーバースロー3人に安定感がある。

攻撃はチャンスに強い3番長井奨哉とパワー・長打力が魅力の4番齋藤竜太郎が牽引。青野誠監督は「2年生も成長し、全体で底上げできている。ナンバーワンを目指し、狙えるチャンスも十分にある」と話す。



文 門田龍一 写真 長尾翼

「ストレートでコースを突き、三振を取る。ピッチングをみせたい」

「目の前の試合に集中し、全員一丸で一戦一戦を勝っていく。

優勝を成し遂げてみせる」。丹原の本格派右腕・永井滉大は力強い投球に磨きをかけ、チームの2000年

以来の甲子園に照準を合わせる。昨春秋の県大会はベスト4。1回戦の松山聖陵、準決勝の松山城南(現・松山学院)と先発した2試合で延長戦を投げ切り「最後まで自分の力を出せた」と手応えをつかんだ。

冬場はひたすら走り込んだ。右ひじのクリーニング手術で投げられない時期もあったが、夏の猛暑を乗り越える体力を養った。春の大会は大事をとってベンチを外れたが、復帰を果たした。持ち味である重いストレ

ートとコントロールの良さは健在。「ストレートでコースを突き、三振を取れるピッチングをみせたい」

丹原東中3年の秋には、軟式野球の県選抜のエースとして全国中学生都道府県対抗大会で3位に貢献。「地域の人たちに愛される環境で高校野球をしたい」と丹原に進学を決めると、一緒に甲子園を目指そうと地元を中心とした同級生17人も集まった。コーチとして支える父・保志さん

は、丹原が夏の愛媛大会で初めて決勝に進出した1995年のエースだった。「最後の夏は、仲間やこれまで後押ししてくれた多くの人たちに恩返しをしたい」と永井。26年前の父を超え、愛媛ナンバーワンを目指す。

KEY PLAYER 5 丹原3年

永井滉大